

文春新書 公共事業が日本を救う

番線印

ご希望数

入 残

公共事業が日本を救う

藤井 聡著

文春新書・872円



◆ふじい・さとし
1968年奈良県生まれ。
京大教授。土木計画学。

コンクリートも人も大事

政権交代を実現した民主党には、二つのスローガンがあった。ひとつは「政治主導」。そしてもうひとつが「コンクリートから人へ」という大義の旗だ。民主党の政策はこの二つの理念に基づき、着実に実行されていくものと思われていた。「コンクリートから人へ」というスローガンは、「公共事業イコール悪」という図式も含んでいた。本年度予算で、公共事業費が約2割も削減されたのはそのためだ。そして国民の多くは、「公共事業はムダだ、不要だ」と拍手喝采した。わずか1年数カ月前だ。

しかし、状況はすでに大きく変化している。政治主導という言葉はもはや消滅したに等しい。「コンクリートから人へ」という方針は、失われて「そいもの、政権運営の弊害にすらなっている感は否めない。

かつて永田町にはびこった「族議員」たちが、自分の利権を最優先した結果、不要な道路やダム、橋などを全国に作っていたことは確かだ。だが、今や国民の多くは、公共事業の

大幅削減が日本経済の救済策になるとは考えていないだろう。むしろ、官製不況が起きているとらえている人も少なくない。

そうした現実を踏まえた上で、本書は、行き過ぎた「公共事業悪玉論」が日本経済の活性化を妨げていると指摘する。公共事業とは、人々が生活しやすい街をつくるためのインフラ整備である、という。治水、利水のためのダム建設、海洋国家である日本の国益を守るための大型港。これらの事業は、地域経済を活性化させるという意味でも欠かすことができないと、データを駆使して説明する。また、老朽化した橋をメンテナンスすることは、それこそ「命」を守るための公共事業であると説く。

一見、極論のように聞こえるがそうではない。なぜなら、「コンクリートも人の命も大事」なのだから。民主党政権にはぜひとも参考にしてもらいたい内容だ。願わくば、参考程度で終わらないことを祈る。

△評者▽横田由美子・ルポライター

FAX 03 (5213) 5447 文藝春秋 文庫・新書営業部